

瀬戸の魚「セトダイ」

神戸市立須磨海浜水族園
動物展示課 魚類展示マネージャー

おさ だ のぶ ひと
長 田 信 人

1. はじめに

神戸市立須磨海浜水族園は阪神間唯一の自然海岸である須磨海岸に面しており、そこには水産資源の豊富な瀬戸内海が広がっている。瀬戸内海で水揚げされる水産物の中には明石の蛸や鯛、広島のカキのような全国的な知名度を誇るものからテンジクダイ(ネプト)、タマガンゾウピラメ(デベラ)などその地域で昔ながらの食材として消費されるものもあり、変化に富んでいる。

黄色と黒の太いバンド模様が特徴的なセトダイ(写真1)もそんな地域内で消費される水産物のひとつである。

今回この記事を書くにあたり、セトダイについてさまざまな情報をまとめたので、ご笑覧いただければ幸いである。



写真1:セトダイ

2. セトダイとは

図鑑¹⁾によるとセトダイ(*Hapalogenys analis*)はスズキ目イサキ科ヒゲダイ属の魚で、近縁種にはヒゲダイやヒゲソリダイなどがある。瀬戸内海や有明海、富山湾～鹿児島県長島の日本海・東シナ海沿岸、和歌山県～宮崎県にかけての太平洋沿岸、朝鮮半島～台湾にかけて分布している。西海区水産研究所²⁾によると、成長は遅く満1年で体長5.4 cm、2年で8.6 cm、3年で10.6 cmとなり、最大体長は25 cmほどになるとされている。水深30～70mほどの砂泥底の岩礁に生息しており底引き網や刺し網、釣りなどで漁獲される。Soh, H.ら³⁾によれば主にエビやカニ、端脚類、多毛類などを食べるが、その割合は体サイズによって異なり、10～14 cmではエビの仲間や端脚類が多く、14～18 cmではエビの仲間が大半を占め、18 cm以上ではエビの仲間と多毛類が多くを占めるようになる(図1)。

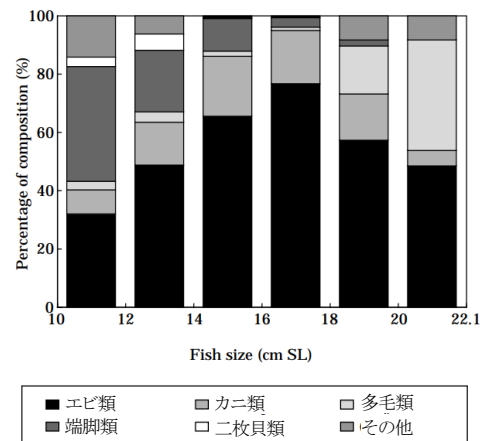


図1 セトダイの餌料組成と体長の関係

Soh, H.-Y. and Kwak, S-N. (2005)より改変

3. 地域ごとの利用

冒頭で地域内で消費される水産物であると紹介したが、著者があちこちでヒアリングしたところ、その評価や食べ方は地域によってさまざまであった。須磨海岸に拠点を置く、すまうら水産の代表者は「大きな魚ではない上に頭が大きいので食べる場所は少なく、刺身などには向かないが、脂ののった5月か

ら6月中旬にかけては抜群にうまい。特に塩焼きがおすすめ」との評価だが、少し西に移動した明石浦漁業協同組合の方からは「高くても1,000円/kg程度で安い魚の部類に入る。旬に値が上がるということもない。おいしいと聞いたことはあるが、食べたことは無い。大きくないので水揚げ量も多くないため、そこまで気にしたことはなかった」とのことだった。更に西にある江井ヶ島漁協ではその存在すら噂程度でしかなく、食べるどころか見たこともないということであった。これが更に西にいき広島県栽培漁業協会⁴⁾によれば、県内の忠海地方では梅雨明けに行う“泥落とし”の宴会では必ずセトダイの煮物を食したとする食伝統があったとされている。また、呉周辺でも煮つけが主流で身離れが良く、ある程度の大きさであればメバル類とほぼ同等の値段でスーパーに並ぶ魚となっていたとのことだった。

このように各地域でその評価は割れるのだが、面白いことに地方名は共通して「タモリ」であり、標準和名のセトダイより知名度が高い。タモリの由来にはいくつかあり、魚名考⁵⁾によると小範囲を遊泳することから田を見回る人の意味で「田守」とする説があるが、各種ネットによると、そのいかつい恰好から平安末期の武将「平知盛(たいらのとももり)」を偲んでそれが訛ったとする説がある。

4. 繁殖生態

鎌田ら⁶⁾によると雌雄ともに体長110mm程度の個体において生殖腺重量の上昇が見られ、実際に雄で体長109mm、雌で体長112mmの個体において生殖腺の成熟が肉眼で確認されている。また、時期としては6月ごろから生殖腺重量の上昇が見られ、7月でピークとなり、8月9月と徐々に下がっていき、10月以降は一定の低い値となる。これらのことから産卵期は6月～9月と考えられている。また、鈴木ら⁷⁾が観察した水槽内での産卵行動によると、産卵の約1時間前には、雄が岩陰から別の岩陰にいる雌に対して求愛を開始する。求愛を受けた雌はこれに応え、雌雄は岩陰近くで半ば開口した口先や腹部を互いにつつき合う行動を繰り返し行う。時間の経過とともにこれらの行動は頻繁になり、産卵の30～50分前には上述の行動に加えて、雄が雌の腹部を口先で押すようにして水槽底から中層へ泳ぎあがる行動も見られるようになる(図2A)。

産卵の10～15分前には雌雄は水槽底で互いの尾びれをつつき合いながら巴形となって旋回した後、水槽底から中層へらせん状に上昇する行動が頻繁に認められる(図2B)。放卵放精は雌雄が寄りそったまま、雌がやや先行して水槽底から水面に向かって急上昇し、腹部をそろえて水面直下で行われる。放卵放精後、雌雄は別々に下降して岩陰に戻る(図2C)。受精卵は卵径1.22～1.25mmで21時間～24時間でほとんどが孵化した。広島県栽培漁業協会⁴⁾によれば、孵化後3～4日で開口し、そのサイズは全長4.3～4.5mmとなりワムシを摂餌するようになる。初期の仔稚魚の飼育は生存率が非常に悪く成長も遅いが、全長20mm(孵化後60日)を超えるころになると飼育は比較的容易になる。

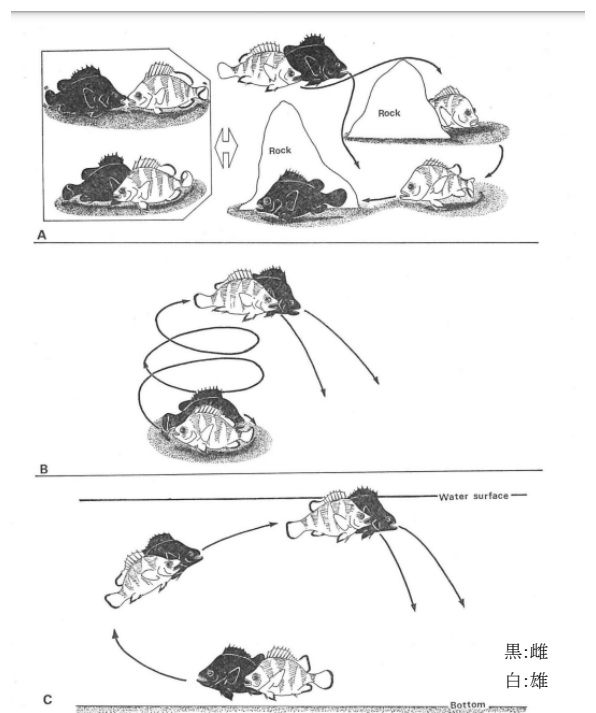


図2 水槽内におけるセトダイの産卵行動

鈴木ほか (1983)より改変

5. 最後に

今回、セトダイについて書かせていただいたが、瀬戸内海沿岸地域で利用がここまで違うものとは思っていなかった。ただ、食したことのある方たちの評価は決して低くはない。そんなセトダイの水揚げ量

だが、そのみの記録はほとんど無いものの漁師からのヒアリングでは減少傾向にあると感じているようであった。種苗生産技術開発や水槽内での産卵行動の記録もあるので、ぜひともセトダイを使った食文化を過去のものとしないうように、気が付いたらいなくなっていたということが無いように、水族館などでも微力ながら飼育、繁殖に取り組んでいきたい。

6. 参考文献

- 1) 中坊徹次(編)(2013) 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 神奈川 941 p.
- 2) 水産庁西海区水産研究所(1986) 東シナ海・黄海のさかな. 日本紙工印刷, pp. 224-225
- 3) Soh, H.-Y. and Kwak, S-N. (2005) Feeding habits of belted beard grunt, *Hapalogenys mucronatus*, in the coastal waters off Sori Island, Yeosu, Korea. Korean Journal of Ichthyology, 17(4), pp. 258-263.
- 4) 広島県栽培漁業協会(1993) 水産種苗生産技術共同開発報告書, セトダイの種苗生産技術開発.
- 5) 榮川省造(1974) 魚名考. 甲南出版会, 兵庫 380 p.
- 6) 鎌田崇史, 坂井陽一, 橋本博明, 具島健二(2002) 瀬戸内海燧灘におけるセトダイ *Hapalogenys mucronatus* の生殖について. 生物圏科学. 広島大学大学院生物圏科学研究科紀要, 41, pp. 13-21
- 7) 鈴木克美, 日置勝三, 田中洋一, 北沢博(1983) 水槽内におけるセトダイの産卵と初期生活史. 東海大学紀要海洋学部, 16, pp. 183-191